はじめに

総合地球環境学研究所長　立本 成文

総合地球環境学研究所（地球研）は、地球環境問題の解決にむけた学問の創出のための総合的な研究をおこなう目的で、2001年に文部科学省の大学共同利用機関として創設されました。2004年には、国立大学の法人化にともない、地球研も大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員となりました。2006年度には、所員の人数も完成予定時定員規模を達成しました。多様な領域の研究教育職員が集まり、常に新しいチャレンジをする、日本が世界に誇るにたる研究所として大きな羽ばたきをしようとしています。

地球環境問題の根源は、自然にいどみ支配しようとしてきた人間の生き方、いいかえれば、ことばのもっともひろい意味における人間の「文化」の問題であるという基本認識を、地球研は創設いらい一貫して堅持してきています。地球環境問題の解明は、人間（人類）と自然とのあいだの相互作用環を解きほぐし、新たなパラダイムを求めることに他ならないと考えています。地球研の英語名称にResearch Institute for Humanity and Nature (RIHN)と象徴的に表現されています。

地球環境問題の本質を明らかにするために、地球研は研究プロジェクト方式とそれに連動した研究者任期制をとっています。これにより大学共同利用の中枢的な研究機関としての総合性、国際性、流動性、中枢性を保証しています。プロジェクトの選択は、外国研究者をふくんだ完全に外部者だけからなる研究プロジェクト評価委員会によって厳しく評価選考されてきました。定員完成により、今後は地球研としての主体的なアイデンティティを確立することに本格的にとりくむ態勢も整いました。

このように、日本はもとより世界でもユニークな研究体制のもとに、これから研究成果をどんどん発信して、社会貢献に寄与していきます。大学共同利用の研究機関として、法人の特性を生かし、あらゆる可能性を大胆にとりいれながら、創設目的を達成する所存ですので、江湖のご批判とともに、あたたかいご理解とご支援をお願いいたします。

設立の趣旨と目的

総合地球環境学研究所（地球研）は、地球環境問題の解決に向けた学問を創出するための総合的な研究を行うべく、2001年（平成13年）4月、文部科学省の大学共同利用機関として創設されました。

環境の研究は近代諸科学の多くが取り組んできた問題です。地球研の使命は、環境問題の本質を解明して、人間と自然とのあり方を提示することです。環境問題には、次のような三つの異なる次元ないし位相があることを理解しておくことが重要です。

第１は、生活上の環境問題であり、身体やライフ・スタイルと関わる、環境との調和を図るうえで不可欠の諸問題が含まれます。第２は、社会的に構成された問題であり、地球温暖化、生物多様性の喪失、水資源の枯渇など、いわゆる地球環境問題がこのなかに含まれます。環境問題の要因となる社会（政治・経済）システムの解明が重要な課題となります。そして第３は、「真」の環境問題であり、自然科学、地球科学が主として扱う大気、水、大地、気候など地球システムのメカニズムとその変動に関わる諸問題が含まれます。

環境学は、あらかじめ完成され、体系化されるものではなく、未来の人類の存続のために不断に作りあげ、構築していくものです。その点で、常に変化するダイナミックなシステムの構築を目指すべきものでしょう。

地球環境学は、環境問題を地球全体とそこに住む、あるいは住むであろう人類と生物全体の問題として考える立場を堅持します。総合という意味は、学問領域の総合を意味するとともに、現象を全体、総体として把握しようとする営みであることを指しています。

「地球環境問題の根源は、人間の文化の問題である」と位置づけると、地球研が目指す総合地球環境学は人間の生き方を問う人間科学 humanicsとなるでしょう。この点で、総合地球環境学は、自然のなかの人間（性）の問題を扱う環境学の原点に立つべきと考えています。

地球研の特色

総合性

近年、地球環境問題の解決を目指した研究がさまざまな形で世界的に進められています。地球研では、地球科学的なモニタリングや観測などの基礎研究ではなく、人間生活との関連性を含む総合的な枠組のなかに位置づけ得る調査研究・データを集積する基礎研究が必要であると考えています。もともと、人間の生き方（ライフ・スタイル）や文化の問題に着目した研究は、人文社会系の方法や視点に基盤をおくものでありますが、そこに自然系の研究視点や方法を採用することが重要であると考えています。自然系と人文社会系からの双方向的なアプローチが人間科学としての地球環境学の総合化につながるといえるでしょう。

流動性

地球研では、その構成員である教授、准教授、助教ともに任期制に基づいて研究プロジェクトに参加し、プロジェクト研究員等についてもプロジェクト終了とともに任期を終えることになっています。プロジェクト自体が人事的な流動性を保証しています。また、一般共同研究（インキュベーション研究。以下、ISと書きます）、予備研究（以下、FSと書きます）、本研究（以下、FRと書きます）へと移行する段階的な研究体制により、３つの研究段階に応じて、研究内容や研究組織に柔軟な対応をすることができます。また、国内８つの流動連携研究機関との恒常的な人的交流を通じた流動性を実現しています。こうして広範囲な分野の研究者の参画をもとに総合的な地球環境学の構築を発展的に目指すことができます。

国際性

地球研では、国内の研究者のみならず、国外研究機関との連携協定を通じて、国外研究者の参加をえてプロジェクト研究を実施しています。また、国外の研究機関における企画や運営にも積極的に参加するとともに、国外研究者を地球研の客員教授や研究員として招聘しています。さらに、一昨年度からは国際プレシンポジウム（平成17年度実施）、第1回国際シンポジウム（平成18年度実施）と４つのサテライト・シンポジウム（平成18年度実施）に国外22名、国内10名の合計32名の研究者を招へいしました。第２回国際シンポジウム（平成19年10月実施予定）でも、十数名の国外研究者の招へいを予定しています。

中枢性

総合性、流動性、国際性を担保するためには、個々の研究プロジェクトにおける専任のリーダーによる指導的な立場からのプロジェクト推進はいうに及ばず、所長をはじめプログラム主幹が中心となって地球研における地球環境学の構築に向けての取りまとめを行い、国際シンポジウムや自己点検評価、外部評価への対応においても中枢的な役割を発揮することとします。

←中国南京市郊外の田植え風景。かつて日本の各地でみられた田植えと驚くほどよく似ており、田植えという所作が中国から渡来したことがわかる。
なお、最近中国でも「田植え機」が普及しているので、こうした田植え風景は中国でもみられなくなるだろう

研究プロジェクト方式

地球研では、現行の21世紀COEプログラムやグローバルCOEプログラムのように５年を時限とする研究体制をとっていますが、研究プロジェクト方式は段階的な評価を経て行なわれるもので、研究の進め方は５年一貫方式とはまったく異なっています。すなわち、ISによって研究のシーズが企画・立案されます。そして、半年から１年後にFSの候補となります。FSに進むことが認められると、１年程度の予備研究を実施することになります。そして、研究プロジェクト評価委員会によって適切と認められれば、運営会議の承認を経てはじめてFRに進むことができます。そして、１年間のプレリサーチ（移行準備期間。PRという）を経て、５年程度の研究を行います。本研究においては、２年目終了時に中間評価を受け、終了時にも厳格な事後評価を受けることになっています（15ページ「本研究実施までの流れ」を参照）。

したがって、研究計画の妥当性、実現可能性、成果の意義などが何度にもわたって評価、検討される仕組みになっており、研究プロジェクトの研究がプロジェクトの自主性を重んじつつも平板な積み上げにならないように配慮されています。

人間文化研究機構のなかの地球研

地球研は、国立大学法人法に基づき、2004（平成16）年４月１日に設置された大学共同利用機関法人「人間文化研究機構」（構成機関は、地球研のほか、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、国立民族学博物館）の一員となりました。地球研としての独自の研究を推進する一方、人間文化研究機構の進める連携研究、資源共有化事業、地域研究等の新規事業に加えて、公開講演会・シンポジウムなど、機構主催の諸事業や共同利用活動に積極的に関わっています。とくに、連携研究「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究」については、その一翼を担う「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」を地球研が中核機関として進めています。

人文社会系の研究機関を中心とする人間文化研究機構のなかで、地球研が自然系のアプローチを含む統合的な地球環境学の研究を人間文化の問題としておこなう機関として、今後、機構内の他機関や全国の大学・研究機関との連携を進めていくことのできる大きな可能性を秘めています。

人間文化研究機構の連携研究「人と水」のシンポジウム「水と文明」

人間文化研究機構の連携研究「人と水」の研究連絡誌『人と水』。これまで0号～2号を発刊。テーマ別の特集を企画し研究成果の発信と共有化を進めている

中期目標・中期計画

地球研は、2004（平成16）年より人間文化研究機構の一員として6ケ年の中期目標・中期計画を設定して研究事業を行なってきました。人間文化研究機構全体の中期目標と中期計画にしたがい、機関ごとの取り組みを実施し、その実績について年度ごとに報告書をまとめて自己点検を行なってきました。

中期目標の達成度に関する評価については、文部科学省の国立大学法人評価委員会（法人評価委員会）の要請を受け、独立行政法人大学評価・学位授与機構が人間文化研究機構の中期目標の期間における業務の実績のうち、教育研究の状況についての評価を実施して、その結果を法人評価委員会に提供して、公表することになっています。

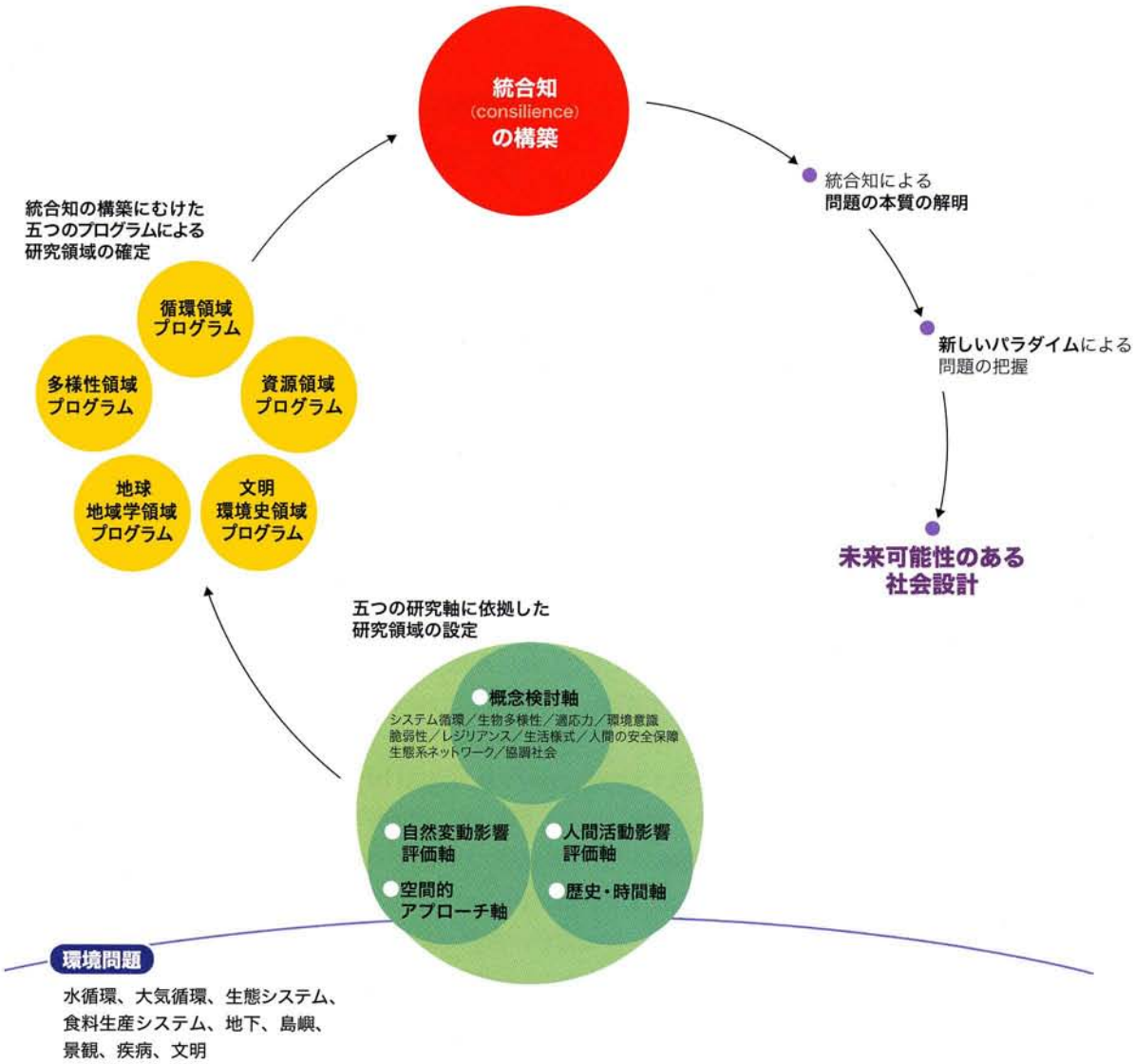
2007（平成19）年度には、中期目標の期間における業務実績についての最終評価をうけるための暫定評価に向けた取り組みを進めることになっています。このなかで、評価の基礎となる地球研の研究のあり方についての自己点検評価を適切かつ効果的に実施するとともに、独自に外部評価をうけることにより、教育研究評価に係わる実績報告書を作成することになっています。

地球研の目指すもの――統合知に向けて

地球研では、さまざまなプロジェクト研究をもとに、人間と自然との相互作用環に関する研究を進めています。研究の地域や時間的な幅も多様ですが、研究所として個々の研究をたばねる研究の統合にむけた方向性を明確に提示することが重要であると考えています。ここで、これまでの研究活動や所内外の意見や議論から、地球研のめざすべき方向と指針について提示します。

地球研の研究プロジェクトがこれまで環境問題として取り上げてきたのは、水循環、大気、気候、海洋、地下環境、島嶼、生態システム、食料生産システム、疾病、景観、文明など多岐にわたるテーマ群でした。これらの個々の研究は、特定の研究軸に依拠したものとして仕分けされてきました。

この点を踏まえ、地球環境問題に関する統合知（consilience）を構築することが地球研の大きな使命であると考えています。統合知の構築により、地球環境問題の本質を明らかにし、新しいパラダイムによる問題を把握することが可能となります。そして、そこから未来可能性のある社会の形成につながる設計をすることができると考えています。



プログラムと研究プロジェクト

地球環境学という新しい研究の実際面では、基本的な方法論が重要であることはいうまでもありません。必要なことは、研究の領域設定を確定することと、得られたデータから新しいパラダイムを創出することであろうかとおもいます。

統合知の考えに基づき研究成果を統合するためには、個々のプロジェクトをクラスターごとにまとめて、「プログラム」として新たに領域を設定することが肝要です。プログラム主幹はプログラムの成果取りまとめに責任をもつ役割を担っています。

今年度からは、次のようなプログラムをたて、その統合知をはかる方向で、プロジェクトの研究成果を総合的に整理し、再編する戦略を立てることにします。

循環領域プログラム

人間の生存圏を中心に循環する、水、大気、炭素、窒素などの「モノ」の過不足、不均等な分布、過剰使用などがもたらす諸問題を主たる問題とします。

多様性領域プログラム

近年問題にされる生物多様性（遺伝的多様性やニッチの多様性を含む）のほか、言語、社会構造、宗教、世界観など文化の多様性の喪失を主たる要因として生じた地球環境問題を扱います。

食・資源領域プログラム

人間の生存を支える食やエネルギーおよびその生産手段である広義の農業（農林水畜産業）にかかわる問題を扱う地球環境問題を扱います。

環境史・文明領域プログラム

「人と自然の相互作用環」としての地球環境問題の歴史を、学際的観点から解明します。

超域領域プログラム

従来のどの学問分野の枠にも属さない、まったく新たな地球環境学の枠組みを構成することが期待される新学問領域です。

施設の紹介

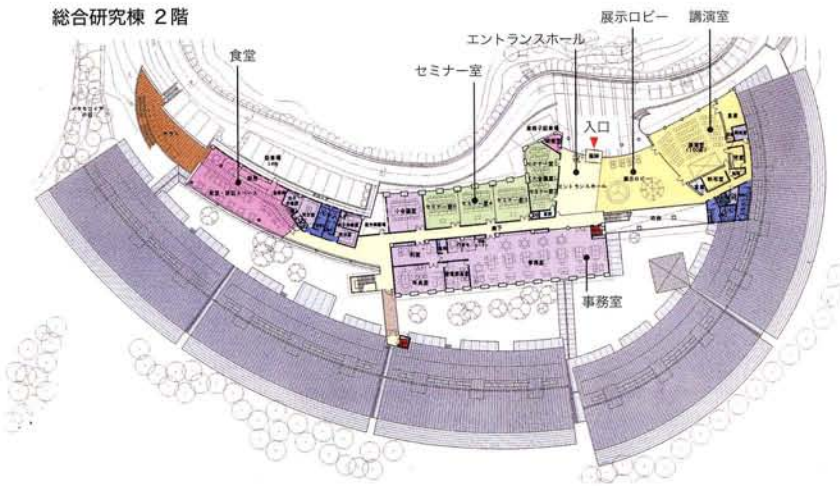
地球研では、いわゆる地球環境問題の根源を、ことばの最も広い意味における人間の「文化」の問題であるという基本認識をもっています。そして複雑な人間という存在と自然との多様な関係の解明を目指して、いわゆる理系・文系など既成の分野を超えた真の総合的な学問の基盤形成を目指しています。そのためには、そこに集うスタッフが絶え間なく議論を繰り返し、互いに切磋琢磨できる環境の整備が肝要だという思いで、設計した施設です。

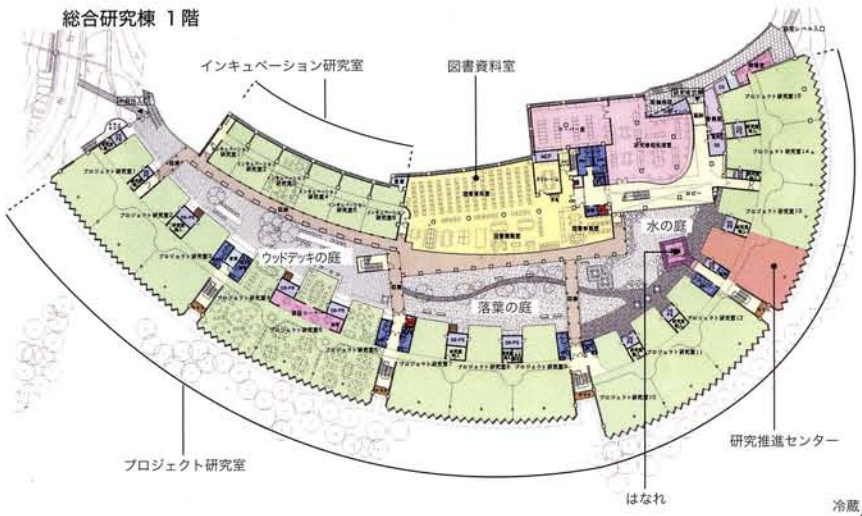
地球研施設にある研究室は、わん曲した全長150mの大空間にすべてのプロジェクトが有機的な連携をもつような開放的プランとして設計されています。内部だけでなく外部からのさまざまな研究者が相互に接触・融合できる施設の共同利用性の機能を最優先するように配慮したものとなっています。つまり、プロジェクトごとの独自性にもとづく共同研究を可能にし、しかもそれらを相互に有機的につなぐ空間配置が特徴となっています。建物のほぼ中央には、多くの人が利用する図書室や情報処理室を配置するとともに、日常的な議論を行うために三種のサロン的空間も準備されています。また、地階には、機能に応じた実験室がクラスター群として設置され、研究室と同様、共同利用における利便性と連携性を重視した設計となっています。

別棟になっている「地球研ハウス」は、宿泊設備を備えています。とくに、ハウス入り口左手にあるアセンブリーホールとダイニングサロンは、宿泊者に限ることなく地球研関係者が集う場所としてオープンに使えるようになっています。

〈上左〉総合研究棟の外観　風景ととけ込むように感じる落ち着いた外観です
〈上右〉プロジェクト研究室　三つのプロジェクトが入った大スペースが五つつながっています。天井から自然光がたっぷり入るよう工夫されています
〈下左〉地球研ハウス　国内外の研究者の短期宿泊、長期滞在が可能です。ゲストと地球研スタッフの交流の場が設けられています
〈下右〉はなれ「水の庭」に浮かぶように建てられた和風の談話室です。中央には掘りこたつ式のテーブルがあり、四方には簾（すだれ）がかかっています

■ 総合研究棟平面図





〈写真上から〉
エントランスホールと展示ロビー　地球研の活動を紹介する展示を計画しています
中庭（ウッドデッキの庭）人と建物と自然が一体となって交流できる場所として、水の庭、落ち葉の庭、ウッドデッキの庭からなる中庭をもうけました。中庭をはさんで、研究室や情報処理室などが集約しています
食堂　ウッドデッキのテラスを備えた明るく開放的な空間は、スタッフの憩いの場となっています
実験室　多様かつ高度な実験に対応できるように設計されています。最先端の質量分析装置など、多くのプロジェクト研究を支援する環境が整備されつつあります

研究成果の発信

国際シンポジウム

2006年11月6～8日に第1回国際シンポジウムを開催しました。テーマは「水と人間生活」で、11月6日はユネスコ水問題プログラム・コーディネーターのゴードン・ヤング氏と地球研の日高敏隆前所長による公開講演を行い、約1,300名の聴衆の参加を得ました。11月7～8日には、2つのセッション「水のアンバランス」、「水をめぐる人間と自然の相互作用環」を設け世界各国の研究者を交えた活発な討論を行いました。シンポジウムの成果は英文報告書（プロシーディングス）にまとめました。なおこのシンポジウムを開くにあたって、2005年には2度のプレシンポジウムを開催し貴重な経験を蓄積しました。

2回目にあたる2007（平成19）年度は、10月29～31日に「緑のアジア――過去・現在・未来」と題するシンポジウムを開催する予定です。

第1回国際シンポジウムに連動して実施されたサテライト・シンポジウム「世界遺産と水」

日高敏隆前所長による基調講演

フォーラム

地球研では、毎年1回、市民を対象とした「地球研フォーラム」を実施してきました。これまで、2002～2006年度に5回のフォーラムを開催し、報告書を刊行してきましたが、2004年からは『地球研叢書』としてその成果を単行本として刊行してきました。地球研叢書は読みやすい内容で市民の理解に供することを主眼として刊行され、多くの読者をえています。2007年度は「地球環境問題としての『食』」を取り上げ、現代における食が地球環境にあたえる影響や自給率の不均衡、未来における日本人の食のあり方などについて幅広い観点から討議します。

回数	タイトル・日時・場所
第1回	地球環境学の課題――統合理解への道 2002年5月17日　国立京都国際会館
第2回	地球温暖化―自然と文化 2003年6月13日　〃
第3回	もし生き物が減っていくと ――生物多様性をどう考える 2004年7月10日　〃
第4回	断ち切られる水 2005年7月9日　〃
第5回	森は誰のものか？ 2006年7月8日　〃
第6回	地球環境問題としての「食」 2007年7月7日　〃

2006年度地球研フォーラムの開催風景

一般市民を対象とする「市民セミナー」会場風景

セミナー

地球研が一般市民を対象とするセミナーには、ほぼ毎月定例でおこなう「市民セミナー」と、地域に出掛け、地元の研究者や市民の参加を得て地域に固有の自然と文化の問題について考える「地域セミナー」があります。

■ 市民セミナー

2004年11月の第１回から2007年４月までのべ18回開催してきました。地球環境問題を具体例に則して分かりやすく解説し、会場から熱心な質問が毎回寄せられています。

回数	テーマ	日時	講演者
第1回	シルクロード地域のロマンと現実	2004年11月5日	中尾正義（地球研教授）
第2回	琵琶湖の水環境を守るには	2004年12月3日	谷内茂雄（地球研助教授） 中野孝教（地球研教授）
第3回	亜熱帯の島・西表の自然と暮らし	2005年2月4日	高相徳志郎（地球研教授） 古見代志人（祖納公民館長）他
第4回	21世紀をむかえた世界の水問題	2005年3月4日	鼎信次郎（地球研助教授）
第5回	地球温暖化、ホント？　ウソ？	2005年4月1日	早坂忠裕（地球研教授）
第6回	地球温暖化と地域のくらし・環境～トルコの水と農から	2005年6月3日	渡邉紹裕（地球研教授）
第7回	鴨川と黄河～その恵みと災い	2005年9月2日	福嶌義宏（地球研教授）
第8回	東南アジアの魚と食	2005年10月7日	秋道智彌（地球研教授）
第9回	生き物の豊かな森は持続的な社会に必要である	2005年12月2日	中静　透（地球研教授）
第10回	環境の物語り論～環境の質と環境意識	2006年2月3日	吉岡崇仁（地球研助教授）
第11回	アムール川・オホーツク海・知床～巨大魚付林という考え	2006年3月3日	白岩孝行（地球研助教授）
第12回	モンスーンアジアからシルクロードへ～ユーラシア環境史事始	2006年4月14日	佐藤洋一郎（地球研教授）
第13回	どうなる日本の自然？　どうする日本の国土？	2006年6月9日	湯本貴和（地球研教授）
第14回	なぜインダス文明は崩壊したのか	2006年9月22日	長田俊樹（地球研教授）
第15回	大地の下の「地球環境問題」	2006年10月20日	谷口真人（地球研助教授）
第16回	景観は生きている	2006年12月1日	内山純蔵（地球研助教授）
第17回	病気もいろいろ～人の医者、環境の医者	2007年3月9日	川端善一郎（地球研教授） 奥宮清人（地球研助教授）
第18回	シルクロード～人と自然のせめぎあい	2007年4月20日	窪田順平（地球研准教授）

■ 地域セミナー

2005年より新たに開始したもので、第１回は富山市において「雪と人―くらしをささえる日本海」をテーマに、地球研、富山県双方から３名ずつの研究者が参加して雪のもつ役割について活発な議論を展開しました。第２回は2006年に鹿児島市において「火山、水、食を考える」をテーマに、地球研、鹿児島県双方から３名ずつの研究者が鹿児島固有の自然と食の話題について熱心な討論を行いました。第３回の平成19年度は静岡県の伊東市で開催予定です。

プロジェクト研究発表会

地球研では、すべての研究プロジェクトの進捗内容について、プロジェクト・リーダーが発表を行い、地球研の研究教育所員のみならず事務職員や外部の共同研究者の前で質疑応答を受けます。３日にわたる研究発表会にはのべ500名以上が参加します。こうした全所的な取り組みと活発な意見交換は地球研における自己点検評価につながる重要な研究活動となっています。

〈2007年（平成19）年度は、12月13日～15日に開催予定〉

「プロジェクト研究発表会」では研究活動の進捗状況を報告

その他の交流会

地球研ではプロジェクト研究発表会のほか、所内スタッフを対象として、次のような交流会やセミナーを定期的に開催し、所員どうしのコミュニケーションを深めています。

■ 地球研セミナー

地球環境学に関わる最新の話題と研究動向を共有し、新たな研究の指針を得るために国内および海外の研究者を講師として招へいし、総合地球環境学研究所における研究活動と有機的な連携を実現するために行うのが地球研セミナーです。本セミナーはほぼ毎月開催し、多面的な研究課題を扱った比較的完成度の高いテーマの紹介と議論に焦点をあてたものです。

〈談話会〉

総合地球環境学研究所の所員、および客員教授、非常勤講師、外来研究員などが地球環境学に関連した個別のテーマについて自由に発表を行い、研究者相互の研究の理解と相互交流を図ります。地球研における多様な研究分野と方法についての議論を行い、地球研セミナーとともに日常的な研究交流の場として重要な機能を果たしています。ほぼ隔週の頻度で研究会を実施します。

〈酒仙サロン〉

勤務時間終了後、自由な意見交換と闊達な議論を喚起するために行う会合です。話題提供者が地球研に関わる事項に対して問題と意見を簡単に提示したうえで、参加者が議論を展開します。ほぼ月に一度の割合で午後５時半から２時間程度にわたって行います。

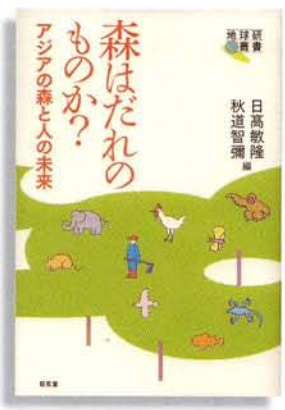
出版物、ニュースレター

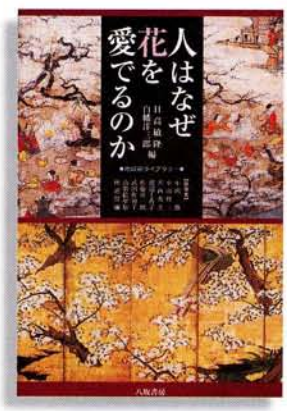
■『地球研叢書』

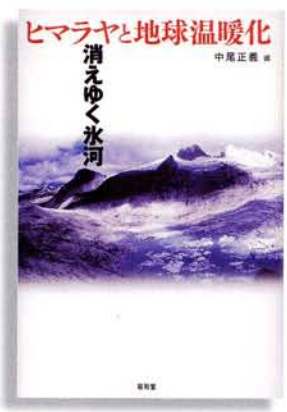
地球研の研究成果を一般に分かりやすい形で紹介する出版物で、これまで『生物多様性はなぜ大切か？』、『中国の環境政策――生態移民』、『シルクロードの水と緑はどこへ消えたか？』、『森はだれのものか？』（いずれも昭和堂）を刊行しています。

■『地球研ライブラリー』

地球研所員による研究活動を広く紹介する学術出版物で、これまで『クスノキと日本人――知られざる古代巨樹信仰』（八坂書房）、『世界遺産をシカが喰う』（文一総合出版）、『ヒマラヤと地球温暖化』（昭和堂）、"*Indus Civilization-Text and Content*" (Manohar)、『人はなぜ花を愛でるのか』（八坂書房）を刊行しています。







「森はだれのものか?」日高敏隆・秋道智彌編　2006年度の地球研フォーラムの成果。日本を含むアジアの森と関わってきた人々の暮らしの変化を１万年から過去100年ほどの時間幅で考察。森と人の錯綜した関係の歴史から、未来のあるべき姿に光をあてる

「人はなぜ花を愛でるのか」日高敏隆・白幡洋三郎編　なぜ人は花を愛でるのかについて、先史考古学、日本史、人類学、美術史、植物文化史などの多面的なアプローチから追求した好著で、2006年度の人間文化研究機構の公開シンポジウム・講演会にもとづく

「ヒマラヤと地球温暖化」中尾正義編　ヒマラヤの氷河は急激に衰退している。最近の観測データをもとにしてその実態を述べるとともに、その原因についても考察している

■ ニュースレター『地球研ニュース』
Humanity & Nature Newsletter

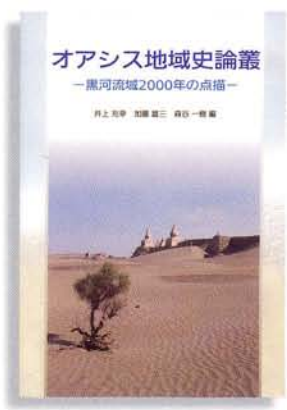
地球研とは何か、どのような活動を行なっているのかなどの最新情報を、研究者コミュニティーや社会に向けて発信するもので、2006年に創刊。隔月発行で年6回を予定。A4版でオール・カラーの読みやすい内容となっています。

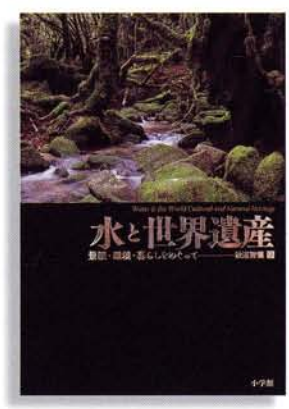
■ その他の成果出版物

地球研のプロジェクトの成果をふまえて、地球環境問題を子どもたちの親向けに語った『子どもたちに語る これからの地球』（講談社）を2006年に刊行しました。

また、『オアシス地域史概論叢――黒河流域2000年の点描』（松香堂）や『黒水域人文与環境研究（カラホトの環境と歴史に関する国際シンポジウム会議録）』（人民大学出版局）など、2006（平成18）年度に終了した5つのプロジェクトを皮切りに、研究プロジェクトの成果がつぎつぎと刊行されています。さらに、終了前のプロジェクトも、『人類学生態環境史研究』（中国 社会科学出版社）、『図録メコンの世界――歴史と環境』（弘文堂）などの成果を出しつつあります。

このほか、人間文化研究機構の連携研究「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」では、地球研が中心となって『水と世界遺産』（小学館）を刊行しています。





『子どもたちに語るこれからの地球』日高敏隆＋総合地球環境学研究所編　誰のための地球環境なのか。子どもたちに大人や親はなにを語り伝えればよいのだろうか。地球環境問題を分かりやすく解説したもの

『オアシス地域史論叢』井上充幸・加藤雄三・森谷一樹編　オアシスプロジェクトの成果の一つ。黒河流域という特定の地域の2000年の歴史を、文書情報や考古学的情報を中心とした論文集の形でまとめたもの

『黒水城人文与環境研究』沈衛栄・中尾正義・史金波編　2006年9月に額済納で開催した国際シンポジウムの論文集。オアシスプロジェクトの成果論文が約半分を占める。英語のアブストラクトが付いている

『人類学生態環境史研究』尹紹亭・秋道智彌編　生態史プロジェクト(4-2)で、中国雲南省の研究者による3年間の共同研究の成果。若手研究者による貴重な論文を集約したもの。環境問題を地域の生態史として描いた労作(中国語)。

『図録メコンの世界』秋道智彌編　生態史プロジェクト(4-2)の研究成果として、東南アジアのメコン河流域に何が起こったかについて、55のテーマで解説。全頁カラーの資料価値と教育的効果の高い図録

『水と世界遺産』秋道智彌編　連携研究「人と水」のシンポジウムの成果。日本を含むアジア地域の世界遺産と水との関わりから、世界遺産地域が抱える問題に鋭いメスをいれたもの。エコツーリズム研究の必読書

研究活動

■ 2007（平成19）年度　研究プロジェクト一覧

Completed Research 終了プロジェクト

プロジェクト区分	リーダー	テーマ
1-1 CR	渡邉紹裕	乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響
2-1 CR	早坂忠裕	大気中の物質循環に及ぼす人間活動の影響の解明
3-1 CR	谷内茂雄	琵琶湖-淀川水系における流域管理モデルの構築
4-1 CR	中尾正義	水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷
5-1 CR	鼎信次郎	地球規模の水循環変動ならびに世界の水問題の実態と将来展望

Full Research 本研究

本研究5年目		
1-2 FR	福嶌義宏	近年の黄河の急激な水循環変化とその意味するもの
2-2 FR	市川昌広	持続的森林利用オプションの評価と将来像
4-2 FR	秋道智彌	アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005
本研究4年目		
3-2 FR	高相徳志郎	亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用
5-2 FR	中尾正義	流域環境の質と環境意識の関係解明──土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として
本研究3年目		
2-3 FR	白岩孝行	北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価
本研究2年目		
2-4 FR	谷口真人	都市の地下環境に残る人間活動の影響
2-5 FR	佐藤洋一郎	農業が環境を破壊するとき──ユーラシア農耕史と環境
5-3 FR	湯本貴和	日本列島における人間-自然相互関係の歴史的・文化的検討
本研究1年目		
3-3 FR	長田俊樹	環境変化とインダス文明
1-3 FR	梅津千恵子	社会・生態システムの脆弱性とレジリアンス
4-4 FR	内山純蔵	東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史
4-5 FR	窪田順平	民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明──中央ユーラシア半乾燥域の変遷
5-4 FR	川端善一郎	病原生物と人間の相互作用環

Pre-Research プレリサーチ

2-8 PR	門司和彦	熱帯アジアにおける環境変化と感染症
3-4 PR	奥宮清人	人の生老病死と高所環境──３大「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応
3-5 PR	山村則男	人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生

Feasibility Study 予備研究

予備研究２年目		
2-7 FS	鄭　躍軍	東アジアの人間活動が大気環境に与える影響の解明と環境協調可能性の探究
2-9 FS	佐藤雅志	伝統的農業の検証にもとづく未来型農業の提言
予備研究1年目		
2-10 FS	村松　伸	移動と滞留、そして、都市の未来可能性
2-11 FS	山内太郎	「人間の安全保障」としての子どもの未来可能性──アジアの環境問題と子ども
3-6 FS	縄田浩志	アラブ社会におけるサブシステンス生態系の研究──生活基盤回復のために
3-7 FS	北澤大輔	カスピ海における産業活動の生態系への影響解明と広域環境保全システムの研究

Incubation Study インキュベーション研究

■ 研究プロジェクトの立ち上げ

地球研における研究プロジェクト方式は、地球研の設立趣旨に沿う特定テーマについて一定期間様々な分野の専門家が共同研究して成果を出すものである。特定共同研究としての研究プロジェクトの立ち上げは、広く研究者コミュニティの協力・協働のもとに行われるもので、次のような過程を経るものとする。　＊「研究プロジェクト実施方針」抜粋

IS の公募

全所員参加のヒアリング及び所内審査委員会による審査連絡調整会議において決定

IS の実施

全所員参加のヒアリング及び所内審査委員会による審査連絡調整会議において決定

FS の実施

全所員参加のヒアリング及び所内審査委員会による審査連絡調整会議において候補決定

研究プロジェクト評価委員会（審査）

予算面から実施時期等を運営会議で審議

PR の実施

研究プロジェクト評価委員会（助言）

FR の実施

研究プロジェクト評価委員会（中間・終了１年前・最終評価）

CR

終了２年後に所内審査委員会・研究推進戦略センターによる事後評価

Incubation Study
インキュベーション研究

概要● 新たなシーズ発掘のための個別の一般的な共同研究で、研究プロジェクトへの発展を目指すもの。研究テーマは、所内・所外から公募。

期間● 半年～１年程度

Feasibility Study
予備研究

概要● インキュベーション研究の展開として、本研究を実施するための予備的研究段階。

期間● 約１年

Pre-Research
プレリサーチ

概要● 予備研究の結果を受けて、予備研究から本研究への移行準備として進められる本研究で、概算要求中であるため「プレリサーチ」としている。

期間● 約１年

Full Research
本研究

概要● 問題解決を志向した具体的な目標設定の下で、研究成果を出すことを目指して進めるプロジェクト。

期間● ３年～５年

Completed Research
終了プロジェクト

概要● 本研究が完了し、評価委員会において研究の成果が評価されたプロジェクト。

■所内審査委員会（ＰＲＴ）

【構成】
所長、副所長、プログラム主幹（５名）、研究推進戦略センター（若干名）
【関係規程】
所内審査委員会規則

■研究プロジェクト評価委員会（ＰＥＣ）

【構成】
すべて所外委員１４名
（うち５名は海外委員）
研究推進戦略センター（若干名）
【関係規程】
研究プロジェクト評価委員会規則、研究プロジェクト評価指針

■連絡調整会議

【構成】
所長、プログラム主幹（５名）、研究推進戦略センター長、管理部長
【関係規程】
連絡調整会議規則

■運営会議

【構成】
委員１４名（うち８名は所外委員）
【関係規程】
総合地球環境学研究所運営会議規則

終了プロジェクトの評価

地球研創設以来のプロジェクト５本が今年終了しました。地球研とそのプロジェクトの今後の「命運」を占う第１期プロジェクトだけに、その成果に所内外の関心が集まっています。

これら５本は、フィールドも研究手法も、むろん対象とする地球環境問題も異なっていました。しかし５件ともに「総合性」という語に代表されるように多方面の専門家を擁し、分野横断型でいかにも「地球研らしい」プロジェクトでした。これらは規定によって、個別に、「地球研プロジェクト評価委員会」による事後評価を受けました。評価の結果は以下のとおりです。なお、プロジェクトごとの詳細な評価結果はホームページに公開しています。

各プロジェクトは、プロジェクトごとの報告書を発行しているほか、プロジェクトによっては一般向けの書籍を出版しているところもあります。

この５プロジェクトは、立ち上げ当時、共通のテーマについて発表を行う意図をもっていなかったものの、どれもが水に深く関係しているので、研究所として昨年11月に「第１回国際シンポジウム『水と人間生活』」を開催し、世界の研究者たちと研究成果を交換しました。この成果については、専門的な印刷物として「RIHN 1st INTERNATIONAL SYMPOSIUM PROCEEDINGS」にとりまとめましたが、その内容をさらに読みやすく日本語にした本の出版も企画されています。著者は日高敏隆前地球研所長です。

1-1CR 乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響（リーダー：渡邉紹裕）
研究目的は総合地球環境学研究所の実施方針に適合し、当初の研究計画および目的は部分的に達成された。

2-1CR 大気中の物質循環に及ぼす人間活動の影響の解明（リーダー：早坂忠裕）
研究目的は総合地球環境学研究所の実施方針に適合し、当初の研究計画および目的は部分的に達成された。

3-1CR 琵琶湖－淀川水系における流域管理モデルの構築（リーダー：谷内茂雄）
研究目的は総合地球環境学研究所の実施方針によく適合し、当初の研究目的はほぼ達成された。

4-1CR 水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷（リーダー：中尾正義）
研究目的は総合地球環境学研究所の実施方針に適合し、当初の研究計画および目的は部分的に達成された。

5-1CR 地球規模の水循環変動ならびに世界の水問題の実態と将来展望（リーダー：鼎　信次郎）
研究目的は総合地球環境学研究所の実施方針によく適合し、当初の研究目的はほぼ達成された。

第１回国際シンポジウム──ポスターセッションでの一こま

第１回国際シンポジウム──議場では白熱した議論が続いた